

R-18
ADULT
ONLY

艦娘

緊縛

こ

れ

し

ょ

ん

Hazuki Tsuitachi
by kishimen

羽
黒



高尾



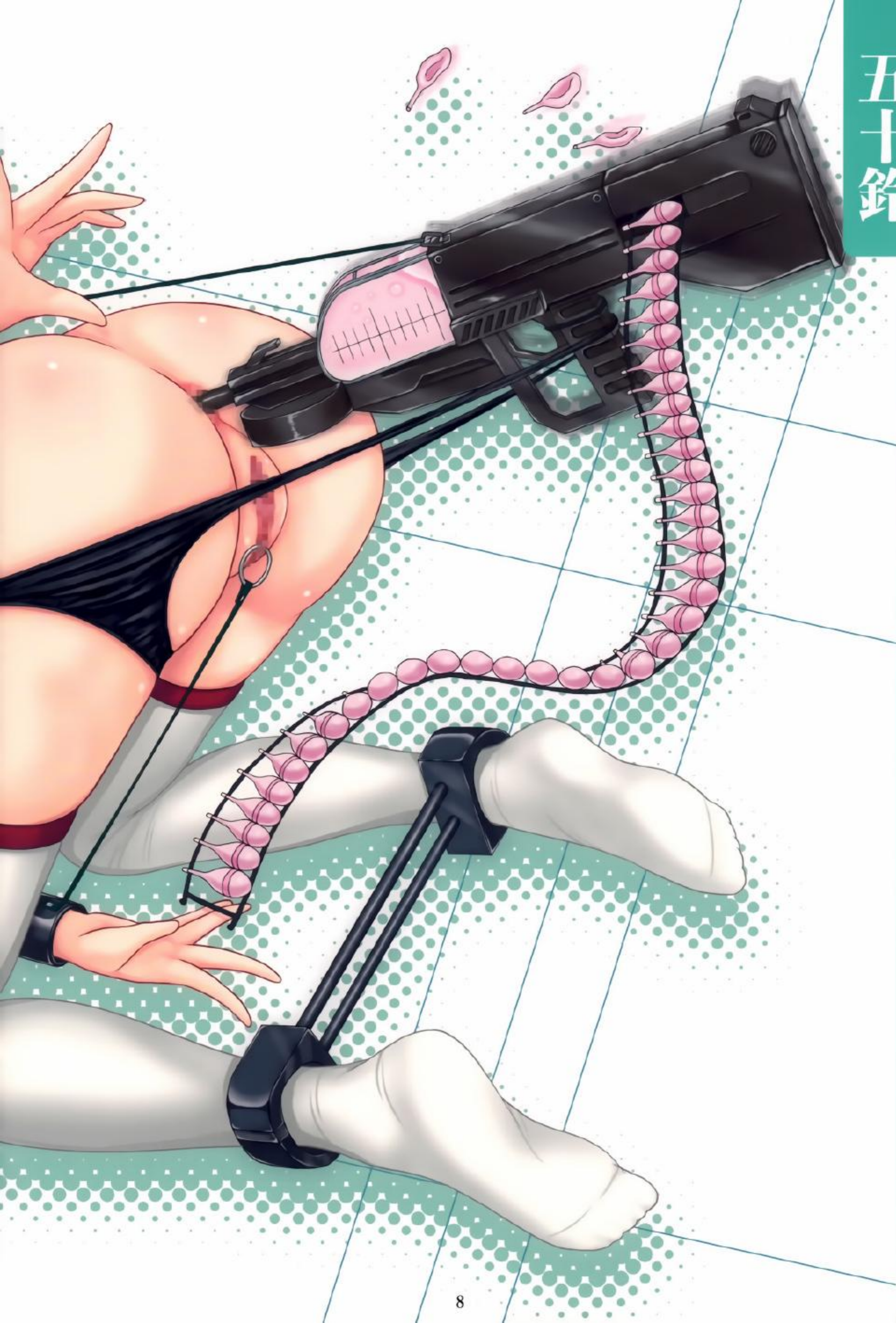
天龍

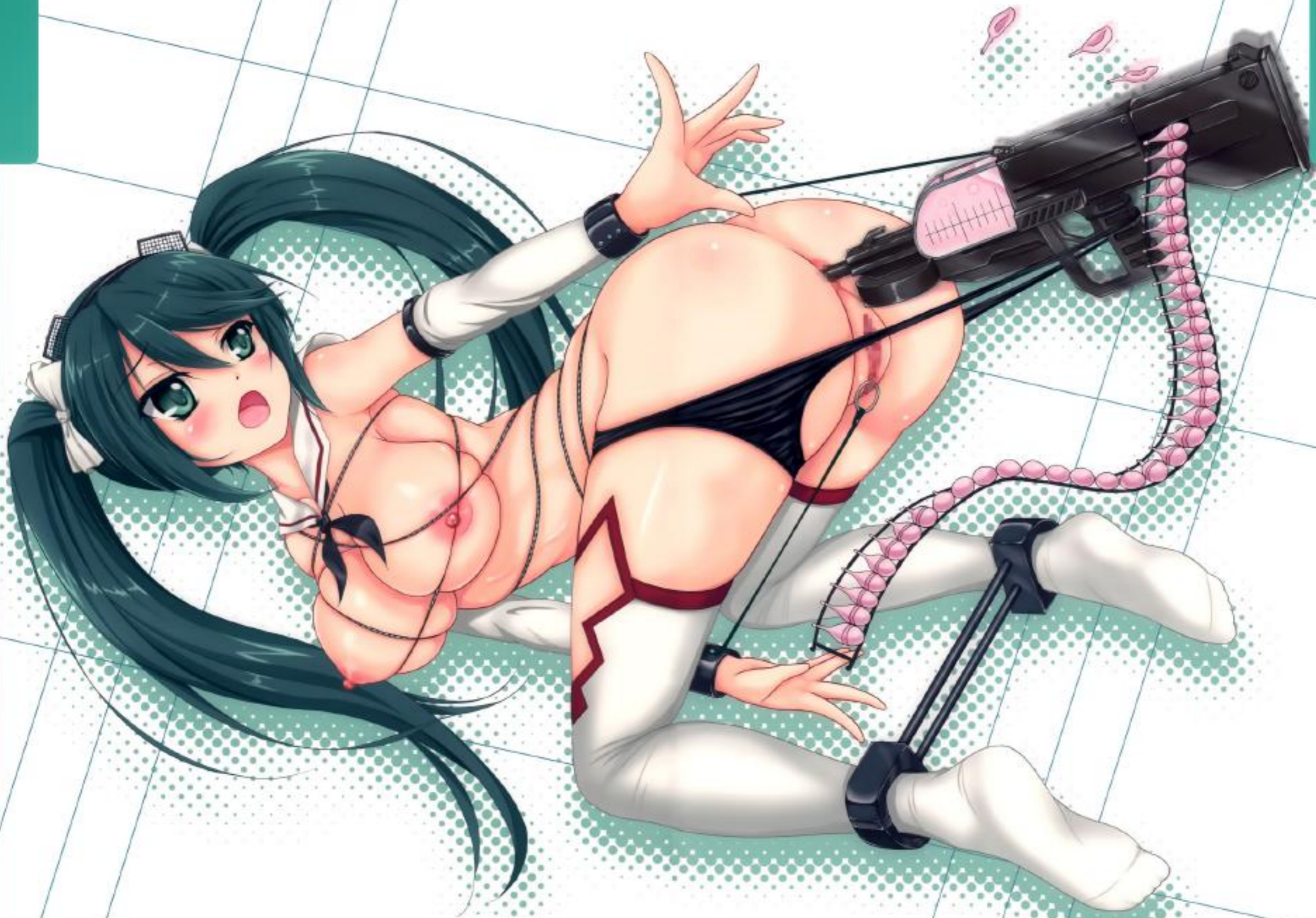


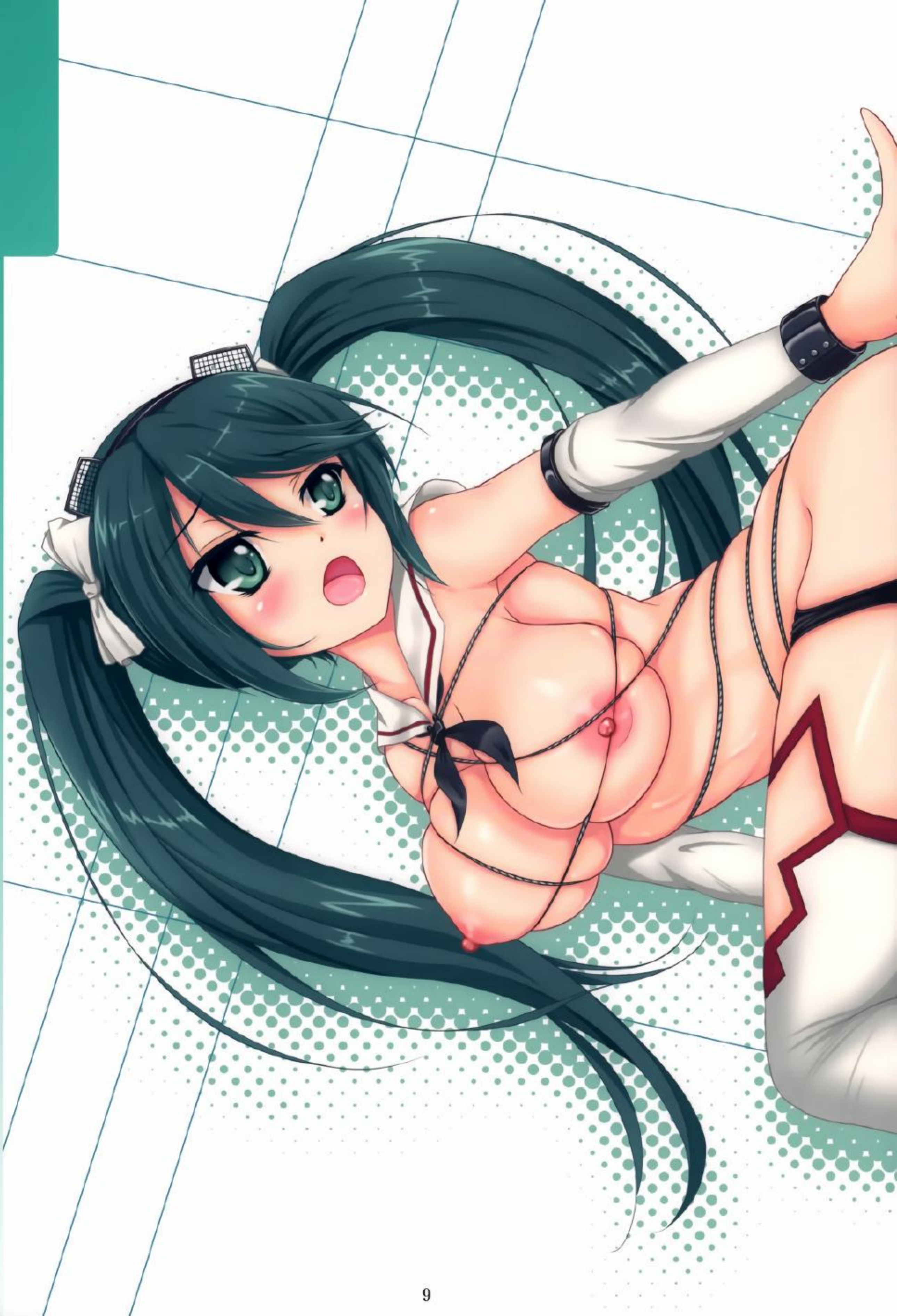
叢雲



五十鈴









雷



天津風



羽黒 差分





天津風・雷差分



五十鈴改三への道

秘書 「五十鈴、帰還しました！大破しているようです。」
提督 「そうか。応急処置を行った後、第十三番ドッグに入渠させる。」
秘書 「第十三番ドッグ・・・提督のプライベートドッグですよ？」
秘書 「あつすみません。了解しました。」

五十鈴 「うううっ・・・」

提督 「気がついたようだね、五十鈴君。」

五十鈴 「わたしは・・・たしか潜水艦の魚雷を受けて大破したところ、長良に助けられ帰還して気を失って・・・」

五十鈴 「ここは？ドッグみたいだけど私の知らない場所」

提督 「ここは第十三番ドッグだよ。」

五十鈴 「十三番ドッグ？そっか、わたし入渠したんだ。」

五十鈴 「んっ、体が動かせない？拘束されている？」

わたしは動かない体に目をやると、兵装が外され体が露出した状態でワイヤーを巻かれていた。胸を隠すものが何もない状態で、わたしは拘束され提督の前にいる。

五十鈴 「いやあ、見ないでっ！」

提督 「ふむ、自分の置かれている状況を認識したようだね。五十鈴君にはこれから新しい改装を受けてもらおうと思う。」

五十鈴 「改装とこの格好にどう関係があるんですかっ！？」

提督 「慌てるな、五十鈴君、それをこれから説明してやる。」

「君の上部装甲はりっぱなものだ。だが、下部はどうかね？」

五十鈴 「それは・・・」

提督 「今日の大破も潜水艦の魚雷を下部に受けてのもの。君の弱点は下部装甲の弱さだ！」

「しかし、弱点を克服するためやたら装甲を着ければ今度はスピードが死んでしまう。」

「そこでわたしが考えた。装甲に頼らず耐久力を上げる方法。それが体の内部からの強化だ。」

五十鈴 「ないぶ？から・・・」

提督 「そうだ、内部からだ。今回の改装は体の内部から苦痛を与え、それに耐えることで耐久力があがる。」

「五十鈴君を苦しめることは、私にとっても非常に辛いことだが、戦場で君を失うことに比べればはるかに楽だ。」

五十鈴 「提督・・・」

提督 「どうだね？この改装を受けてくれるか？」

五十鈴 「・・・わかりました。わたしを思って考えてくれた改装ならがんばります。」

提督 「非常に辛いものになるが、がんばってくれるか？」

五十鈴 「はい、提督！」

提督 「よし、私も心を鬼にしてこの改装に取り組もう！それでいいかね？」

五十鈴 「はい、必ず耐え切って見せます！」

提督 「では、準備を始める。この内部強化用機関銃の銃口を君の菊門に挿入し、抜けないようベルトを手に装着する。」

五十鈴 「き、機関銃？機関銃を内部に挿れたら耐えられないと思いますが・・・」

提督 「安心したまえ。内部強化用機関銃の銃弾はこれだ。液体の薬剤の入ったチューブだ。」

「薬剤を注入する装置だと思えばいい。それでは銃口を挿入するぞ。」

五十鈴 「ひいやっ！な、なんでそんなとこに・・・」

提督 「ん？菊門に挿入するといっただろう？」

五十鈴 「そんなとこダメです！お尻の穴だなんて・・・」

提督 「内部から敵えるには、この穴を使うしかないだろう」

五十鈴 「で、でも・・・うぐぐう・・・あっ痛い」

提督 「我慢したまえ。よし装着完了だ。射撃に入るが準備はいいかね？五十鈴君」

五十鈴 「準備って言われても、何を・・・」

「そっか、準備など意味がない。いくぞっ！五十鈴君」

ズダダダダダダダダッ

すごい勢いでわたしの腸内が膨れ上がる。ひんやりとした感覚が直腸全体に広がりさらに上ってくる。圧迫感を感じるけど、苦痛というほどのものは感じない。

五十鈴 「あああああっ・・・おなか・・・膨らむ」

五十鈴 「は、はい。大丈夫です。」

提督 「銃口に特殊なゴム風船がついていて、薬剤を体内に触れないようにしている。」

五十鈴 「なんで・・・そんなことを？」

提督 「普通に薬剤を注入した場合、薬剤をちよっと入れただけでみんな苦痛で出してしまうからね。」

「この風船は最大6mの長さまで膨らむことが可能で、人間の腸と同じ長さくらい膨らむことができるのだよ。」

「今回の改装では、腸内すべてを満たす量の薬剤を注入できれば成功する計算だ。」

五十鈴 「人間の腸の長さと同じ？そんなのをわたしのおなかの中に・・・」

提督 「そして腸内すべてを満たす量の薬剤がいきわたったとき、この風船は限界に達して破裂する。」

「そのとき最大限の苦痛が始まるのだらう。」

「もう、大腸1.5mくらいは達したかね？小腸に入ると狭い通路だからより圧迫感がまし苦痛を感じるだろう。」

提督の言うとおり、風船はわたしの腸内を駆け上り小腸に達しているのだらう。

お腹の中をウネウネと弄られ、圧迫感と小さな苦痛が断続的にわたしを襲う。

五十鈴 「くっ、苦しい。それにお腹が重い・・・」

提督 「ああ、大腸で4l、小腸で3l、全部で7lの薬剤だ。重量で7キロにもなるから重かるらう。」

五十鈴 「そ、そんな量・・・無理で・・・す」

提督 「何を言っているっ！これは改装を終えれば君はもう魚雷で大破することもなくなるんだ。」

「それに、もうすぐ薬剤を全部撃ち切る。」

五十鈴 「わたし・・・おなか・・・全部入っちゃた・・・んだ」

提督 「気を緩めるな！全部入った後が本当の改装強化だ。いくぞっ！五十鈴君」

五十鈴 「ま、待って！提督・・・あっ、ああああ」

ズダダダダダダダッ

機関銃がすべての薬剤を撃ち終わる。

わたしのおなかいっぱいに膨らんだ風船が限界に達する。

スパンッ！体内で感じる風船の破裂音。直腸・大腸・小腸、わたしの腸のすべてに薬剤が浸透していく。

五十鈴 「だ、だめスーーーー」

腸全体を苦痛が襲う。苦痛で全身から脂汗がでる。

五十鈴 「お、おなか・・・苦しい・・・て、ていとく・・・」

提督 「さあ、これから本当の改装だ。がんばりたまえ、五十鈴君」

提督がお尻の穴から銃口を引き抜く。そして新たに直径10センチくらいのホースがお尻の穴にあてがわれる。ホースの先にはゴム風船が付いている。提督はしぼんでいるゴム風船をわたしの膣口に指で押し込む。

五十鈴 「ぐうう、提督なにを・・・ううっ、おなかいっぱい・・・」

提督 「君に撃ち込んだ薬剤だが、苦痛を与える以外にもうひとつ効果がある。」

「腸に吸収されなかった薬剤は、腸液と混ざることによって糞便に変化する。」

「これから腹痛と便秘が君を苦しめるだろう。」

「君がそれを出来る限り我慢するよう、この風船を君の膣口に入れたのだよ。」

「腹痛と便秘を我慢できずに糞便を出した場合、膣口にある風船が膨らみ五十鈴君の処女を奪うだろう。」

「自分の糞便に処女を奪われるなど耐えられない屈辱だろう。」

「そこまでして耐えることで君は限界を超える耐久力を手に入れることが出来るのだ。」

そんな、腸内全部に詰まったうんちを我慢し続けるなんて無理よ。

自分のうんちが初めての相手なんて絶対いやっ！

五十鈴 「提督、お願いです！わたしのしよ、処女だけは・・・ゆるして・・・」

んっ、ダメ。出ちゃうらう」

提督 「ふっ、そう簡単にはでないよ。薬剤は糞便に変わるが硬い糞便、硬便に変化するからね。」

「君が思い切り力まなければ漏れはしないだろう。」

五十鈴 「えっ、そんな・・・」

我慢して思い切り閉めていた肛門の力を緩めると、うんちが肛門を押し広げていく。うんちの先っぽがお尻の穴から出ている感じがするけど、それ以上は出て行かない。ふうりと安心したけど、腹痛と便秘がさらに力強くわたしに襲い掛かる。

このままだと自分の意思でうんちをしようと思うのも時間の問題だ。そうだ！時間。わたしはいつまでこの苦痛を耐えればいいのか？

五十鈴 「提督、わたしはいつまでこの苦痛を耐えればいいのか？」

提督 「ああ、この改装は72時間かかる。」

72時間！そんな絶対無理よ。今だって我慢の限界でうんちしたいのに。

1時間だって持つかわからないわ。なんとかしないと、わたしの処女が……

五十鈴 「提督、お願いします。処女だけは……自分のうんちで失うなんて嫌です！」

提督 「まだ失うと決まったわけではないだろう？」

五十鈴 「で、ですが、もう我慢の限界です！お願いしますっ！」

提督 「……わかった。もうひとつ糞便の出るルートを追加して処女喪失を回避できるようにしてやろう。」

五十鈴 「ほ、本当ですか？！」

提督 「ああ、だがより辛いものかもしれないし、膣口の風船を外すわけではない。」

五十鈴 「えっ、外せないんですか……でも処女を失わなくていいんですよね？」

提督 「ああ、五十鈴君の努力しただがな。」

五十鈴 「わかりました。その方法を早く！お願いします。」

提督は膣口に繋がったホースを一旦外し丁字の分岐プラグを接続し一方を膣口の風船に、そしてもう一方を……

五十鈴 「えっ！」

わたしは思わず口を閉じたが、提督は私の鼻をつまみ口を開いた瞬間に開口具をすばやくはめてきた。

そして開口具の穴にもう片方のホースを接続していった。

五十鈴 「うぐっ、うぐぐぐ……」

提督、どういふことですか？説明を求めたくても開口具で声を出せないわたしの訴えを理解したのか、

提督が説明を始めた。

「この改装は薬剤を72時間下腹部入れ耐えることで成功するものだ。」

「出してしまえば失敗になるので五十鈴君の大事な処女をかけてもらえば必ず成功すると思っただがな。」

「どうしても堪えられないなら、出したものをまた元に戻す必要がある。」

「君の出した糞便を、口からもう一度体内に取り込んでもらおうことだね。」

「もつとも君が出す糞便の量が、食べる量より多ければ膣口の風船が膨らみ処女を喪失することになるが。」

「72時間の苦痛を紛らわすため君の話し相手にもなると思うってただが、

この状態では会話は無理だから私は仕事に戻るよ。」

「それでは72時間後、改装が終了しさらに強くなった五十鈴君に会えることを祈ってるよ。」

五十鈴 「うぐぐぐ……うぐ」

待って！提督、行かないで。わたしの思いは届かず提督はわたしを置いて出て行く。

ハアハアハア……おなか苦しい、うんちしたいよお……

でも、出したらうんちを食べなきゃいけない。そんな絶対イヤ。

全身脂肪でびっしょりしながら、わたしの苦痛と葛藤は続く。

はああ、そうだ。お尻から口までのホースの間だけうんちをすれば、すこしは楽になるかも。

口まで来ない分だけうんちを出そう。大丈夫、ちよつと出して止めればいい。

わたしはおなかに力をいれて、お尻の穴の力を緩める。メリメリッ！お尻の穴が広がる。

痛いっ！お尻の穴が裂けちゃう！硬いうんちがお尻の穴を限界まで広げながら頭を出す。

はああ、あともう少し、もう少し力を入れれば出そう。

わたしはさらにおなかに力を込めうんちをひり出す。

ピブッ、プリプリプリウウウ……

極太のうんちがお尻の穴を通り抜けると、ビリビリッと電流が流れるような快感が全身に走る。

あああー、うんち出すのきもちいい！

我慢に我慢を重ねてやっと出せたうんちは、わたしに開放感と快感を感じさせた。

あまりの快感にわたしは少しだけうんちをするつもりが、もう口のすぐ傍まで来ていることを

うんちの臭いで気づかされる。

いけないっ！わたしは慌ててお尻の穴に力をいれて閉じるが、うんちは硬くてなかなか切れない。

キュッキュッと何度もお尻の穴に力を入れてようやくうんちが切れた。

しかし、うんちは口のホースの出口まで来ており舌を伸ばせばうんちに触れる距離だった。

ギョルルルッ。結構うんちを出したはずなのに腹痛と便意は再度わたしに襲い掛かる。

全部で7キロのうんちがわたしの中には詰まっている。ホースに出したうんちは1キロにも満たない。

まだ、6キロ以上のうんちがわたしの中にあるのだから、この腹痛と便意も当然か。

そして今度は口元まで来たうんちの臭いがかき続けるせいで吐き気までしてくる。

どれだけ時間がたったのか、ドッグに設置された時計をみると、提督が去ってから30分しかたっていないかった。

72時間なんて無理。きつとわたしは我慢できずにうんちをして口もおま○こもうんちに犯されるんだ。

うんちをしたら気持ちいいぞ。しなければさらに苦痛をあたえるぞ。

わたしの心は我慢せず、うんちをする方へ傾き始める。けど、今度うんちをしたら確実に口内をうんちが満たす。

そうだ、なるべくうんちを味わわないように飲み込んでいけば……

もう、口元まで来て散々臭いは嗅いだし、ただ通っていくだけなら大丈夫。

舌や口内に触れないように喉に流し込めばいいじゃない。

うんちが出来ると思うと、わたしはまたお尻の穴をうんちが通り抜けたときに感じた快感を期待していた。

よし、もう一度うんちをしよう！少しずつ出せば飲み込んでいけるはず。

わたしはまたお尻の穴の力を抜いておなかに力を入れた。一度広がったお尻の穴だから、今度は楽にうんちが出て行く。

プリプリプリウウウ……

やっぱり限界まで広がったお尻の穴からうんちを出すのって気持ちいいっ！

快感に酔いしれていると口内に硬いうんちが侵入してくる。なるべく口内に触れないよううんちを喉に通していく。

んっ、ごふっ、げほっげほっ

喉いっばいにうんちが詰まって吐いてしまった。しかし、口から出せず口内をうんちが満たす。

だめ、うんちが太すぎて飲み込めないっ。口いっばいに溜まっていくうんち。

お尻から出し始めたうんちはすぐには止められず、行き場をなくしたうんちがおま○ここの風船へと流れ込む。

だ、だめえ！膣内で膨らみ始めた風船に焦り、口の中のうんちを処理し始める。

舌で口内にうんちを押し付け、潰しながら飲み込んでいく。

はやく！はやく飲み込まなきゃっ！わたしの処女が無くなっちゃう。

気持ち悪い、苦い、臭い、そんな感覚を忘れて夢中でうんちを舌で押し潰しては飲み、押し潰しては飲みを繰り返した。

ようやく流れ込んでくるうんちを飲み込み終えて安堵したとき、食道からこみ上げて来るものが……

待って！我慢して一生懸命飲み込んだのよ。それを戻すなんて……

唾を飲み込み必死に抵抗するが、こみ上げて来る力は強くてわたしは嘔吐してしまった。

そして嘔吐した物は口内で収まらず、ホース内のうんちを圧迫していく。

メリッ……メリッ……メリッ……

膣内を押し広げていくうんち風船が最後の線を超えた。

プチンッ……

ああああああ……わたしは初めてが……

こんな、こんなことって……ひどいよ。ひどすぎるよ。

わたしは涙を流し絶望するが、腹痛も便意もかまわず襲ってくる。絶望する暇すらないのね。

それに、もうなにも守るものはないわね……うんちを食べることへの抵抗も、守るべき処女膜もなくなった。

提督が去ってから、たった1時間でわたしは守るべきものを失ってしまったのだ。

もう、おなか痛いの我慢することはないんだ。

好きなだけうんちをしておま○こも口もうんちでいっぱいにするばいんだ。

そうだ、お尻の穴を限界まで広げる極太うんちを出す快感だけに身を任せよう。

72時間後

五十鈴 「うんち、うんち、うんちだありいしゅき。もつとお尻の穴をゴボゴボしてっ。んぐんぐっ、うんち美味しい、

いっばい食べるの」

提督 「い、五十鈴君、しっかりするんだ！」

五十鈴 「はああ？て、ていとく？わたしいうんちだいすきになりましたよ！」

「そうだ！ていとくのうんちもくたさい。わたしほしいなあ！」

「あ、ていとくならわたしのおま○こにうんちさせてあげる。うんちちんぽでズボズボしてっ」

「ねえ、ていとく……ていとく……」



あとがき

こんにちは！きしめんです。
最後まで読んでいただき本当にありがとうございます。
今回は早くから制作にかかっていたのですが、表紙のイラストに予想以上の時間がかかってしまい、イラスト数が予定より大幅に減ってしまいました。
あと、五十鈴のお話もタラタラ書いてたら長くて、2ページに収めるのにすごく小さな文字になってしまいました。
毎回反省ばかりですが、少しずつでも前に進めていけたらいいなあと思っています。

次回も艦これのイラスト集を描きたいと思うけど、どうなることやら…
それではまた、みなさまに会えますように！

奥付

発効日：2014/8/17
印刷：ねこのしっぽ様
発行者：葉月一日/きしめん
連絡：mizocombi@gmail.com
Pixiv：http://pixiv.me/medossa

無断転載・複製・複写・インターネット上へのアップロードを禁止します。
18歳未満の購入・閲覧・貸出しを禁止します。



Hazuki Tsutachi
by Kishimen
2014.3.17



艦娘緊縛これくしょん

葉月一日／きしめん